

## 創立 90 周年を迎えて

会 長 伊澤達夫



本会の起源は、1911年に発足した逓信省電気試験所第2部研究会にあるが、1917年5月に電信電話に関する学術技芸の考究、知識の交換および事業の振興を図ることを目的とする学会に改組し、電信電話学会として発足した。したがって、本年5月に創立90周年を迎えることになる。

初代会長利根川守三郎博士の就任演説が会誌創刊号に掲載されているが、この中に当時の先端技術が紹介されており、今後日本で開発しなければならないことなどが指摘されている。例えば、当時の電信線は鉄線が使われていたが、通信速度を上げるためには銅線に替えるべきだが、経費がかかるので通信装置の改良が必要であるといっている。また、研究者が置かれている状況についても言及されており、今後は海外の技術を教えてもらうことは困難になるであろうから、独自の技術開発が重要になる。しかしながら電信電話事業は、設備増設に関心が向いており、研究開発の資金も時間も乏しいのが現状であるが、努力を継続しなければならないともいっている。

現在、基幹通信網の主要技術となっている光通信のことが会誌に初めて掲載されたのは、1920年のことで、雑誌 *Telephony* の記事が紹介されている。光を使って音声情報を送ろうと最初にグラハム・ベルが考え、特許出願したのは1889年のことであるが、実用的な機械が作られたのはその30年後のことで、英国海軍の委託で開発された機械が最初だという。無線よりも遠くまで信号を送ることはできないが、盗聴される恐れがないので有用であり、陸軍で実戦中に使われたという。最近の技術とは比べようもないが、技術者の迫力を感じる。

90年を経た今日、電子情報通信技術の進歩は目覚ましいものがあり、当時の研究者には想像できないほど進歩したが、研究の必要性や研究環境はそれほど変わっていない。電子情報通信産業の研究開発投資は、ITバブルがはじけた時期に幾分減少したが現在では復元しており総体としては問題ないように思える。しかし、基礎的研究に割かれる割合は極端に減少し、目先の商品・サービス開発に重点が置かれるようになってきている。安倍内閣が、イノベーションを標ぼうし、科学技術関係予算も増加傾向にあることは喜ばしいことであるが、産業界のイノベーションを後押しできるほどの額ではない。

初代会長の就任演説では、“根本的発明考案と根本の理論的研究結果の発表”が西欧に比べて少ないから奮発せよともいっておられる。この分野での日本人の貢献は、当時と比べれば大きくなっているがまだまだ十分とはいえない。現状では必ずしも恵まれた研究環境にあるとはいえないが、創立100周年を迎えるころには、学術的にも産業的にも世界をけん引しているのは電子情報通信学会会員であるといわれるように少しでも努力したいものである。